

歯学部

| | | | |
|----|-------|-------|--------|
| I | 研究の水準 | | 研究 7-2 |
| II | 質の向上度 | | 研究 7-4 |

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成 26 年度に硬組織分子基盤センターと歯周病基盤研究センターを硬組織疾患基盤研究センターとして統合し、骨格系の基盤研究と口腔環境制御研究における国内外の中心研究拠点を目指している。また、平成 27 年度に社会医療科学講座に歯科法医学分野を設置している。
- 第2期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）における論文発表数は 631 件となっている。

以上の状況等及び歯学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に形態系基礎歯科学の細目において卓越した研究成果がある。また、歯周病研究では研究成果が国際的な学術誌に掲載され、国内外で招待講演を行っている。
- 卓越した研究業績として、形態系基礎歯科学の「バクテロイデーテス門細菌の IX 型分泌機構と滑走運動についての研究」があり、歯周病細菌等が含まれるバクテロイデーテス門細菌の滑走運動のメカニズムを明らかにしたことで、日本細菌学会の黒屋奨学賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、機能系基礎歯科学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、機能系基礎歯科学の「歯周病原性細菌の生存戦略における新規エキソペプチダーゼの同定と役割の解析」の研究があり、これによりジペプチジルペプチダーゼ（DPP）の基質特異性を明らかにしている。

以上の状況等及び歯学部の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、歯学部の専任教員数は91名、提出された研究業績数は20件となっている。
学術面では、提出された研究業績20件（延べ40件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は8割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績1件（延べ2件）について判定した結果、「S」は5割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○ 論文発表数は、平成 22 年度の 80 件から平成 27 年度の 134 件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

○ 形態系基礎歯科学の「バクテロイデーテス門細菌の IX 型分泌機構と滑走運動についての研究」において、平成 24 年度と平成 27 年度に日本細菌学会黒屋奨学賞を受賞するなど、各分野で奨励賞や優秀賞等を受賞するなどの成果をあげ、国内外で招待講演を行っている。

○ 補綴・理工系歯学の「インプラントの生体親和性・生体力学に関する研究」や、歯周治療系歯学の「歯周炎の発症および進行メカニズムの解明」の研究等において、研究成果が特許取得や製品開発につながっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。